

Title	英国綿業の発達と商業 (綿業に於ける産業革命序説一)
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1930
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.6 (1930. 6) ,p.882(42)- 917(77)
JaLC DOI	10.14991/001.19300601-0042
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19300601-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英國綿業の發達と商業

(綿業に於ける産業革命序説一)

野村兼太郎

英國の産業革命に際し、最も重要な役割を演じたのは綿業である。勿論英國纖維工業中、最も古く、かつ重要であつたのは毛織物業であつた。従つて産業そのもの、發達を論ずる時には、羊毛及び毛布の製造業が議論の中心をなすべきであらう。しかし今産業革命を論ずる場合には、綿業の發達を第一に置かなければならない。英國産業史上に綿花の名稱が現れたのは第十五世紀であり、その著しき發展を見たのは第十七世紀の初期に過ぎない。然るにその後の極めて著しい發達は先づ最初に機械を適用し、古い傳統を有する毛織物業を壓倒して、早く工場制

度を採用するに至つた。この點より見れば、先づ第一に綿業の状態を觀察する必要があるである。

綿業に於ける産業革命を觀察する方法として種々なる見方があらう。直接綿業に於ける機械發達の状態を敍するのも一つの方法であらう。又綿業投資の方面から觀察するのも興味があらう。しかし今は主として綿貿易の發達の方面からこれが内地に於ける斯業を如何に刺戟したかと云ふ問題を中心として論じようと思ふ。何故ならば産業革命を惹起せしめた主要なる原因が新航路の發見に基く商業の發展にありと考へるからである。

故に本稿に於いてはこの問題を明かならしむるために、先づ印度に於ける綿業の發達を概観し、次いでこれが歐洲との交易の發展と共に生じた状態を明かにしたる後、英國に於ける急速なる進歩を述べようと思ふ。かくて最後に産業革命に於ける先驅者としての紡績機械に言及して、この論稿を結ぶつもりである。時期は大體綿業の發展し始めた頃から、産業革命時代に至る即ち一六九〇年頃から一七七〇年頃までに至る約百年間を中心とする。従つてその以後については、必要

とする以外にはこゝでは論及しないつもりである。

二

棉花を栽培し、これから纖維を取り、人類の衣服の用に供するに至つたことは極めて古い。かつ殆どすべての古い國に於いてその傳說的起源を有してゐる。しかし綿布の如き輕織物は比較的溫度の高い地方に於いて早く發明さるゝのが最も自然であらう。従つて印度を以つてその最初のものゝと想定する者が少くない。しかし印度人がその綿布の最初の發明者であるか如何かはこゝでの問題ではない。今日でも印度が主要なる原綿の産地であり、古くからこれが中心地であつたことを知れば足りる。實に英國がその産業革命に依つて決定的な勝利を得るまで、印度は綿業の中心地であつたのである。

第九世紀に於いて二人のアラビア人の旅行者は印度人が世界の他の地方では見られぬ優秀なる織物を織ることを記し(Anciennes Relations des Indes et de la Chine, de deux Voyageurs Mahometans, qui y allerent dans le neuvième siecle.)又マルコ・ポロの旅行記は第十三世紀に於ける印度コロマンデル沿岸(Coromandel)特にマズリバアタム

(Masulipatam)に於ける綿布を叙述して、同様の言をなしてゐる。しかしそれ等より特に優秀なものはベンガル産のモスリンであることは古來有名である。古代印度の社會生活は産業發達に決して有利なものではなかつた。それにも拘らずその土人の手になる織物は今日製せらるゝものよりも遙かに精巧であつた。殊にダッカ(Dacca)は最も優れた織物の産地であつたと云ふことである。蓋し印度の如き氣候風土にあつては衣類の織巧なることを特に必要としたがためであらう。

古代に於ける印度の綿貿易について詳細なる知識を得ることは素より困難である。すでに紀元前第五世紀に於いてエヂプトに棉花が輸出されたと思はれる。又紀元前四四五年にヘロドタス(Herodotus)の著書に棉に關する記事がある。又他方紀元前に印度からペルシャに傳はつたことは、ストラボオ(Strabo)の記事に依つてもこれを推測し得る。即ちペルシャ灣頭のスジアナ(Susiana)州に於いて棉花が栽培され、これが布に織られたと云ふことである。元來これ等の東方民族は早くから麻に依つてリンネルを製造し、これを使用してゐたが、棉花が輸入さるゝと共に、麻布よりも著心のよい綿布の製造が盛んになつた。ユリア(Ure)に

依ればエチプトから最初にリンネルの製造を傳へた者はユダヤ人で、次いでギリシア人、ロオマ人である。従つて恐らく綿花も最初これ等と同じやうな経過を以つて傳へられたものであらう。

ギリシア人及びロオマ人はエチプトに産出する棉花 *Gossypium arborum* を使用してゐたが、これ等は枕の詰物等に使用するに適してゐたに過ぎない。之に反して印度産の棉花 *Gossypium herbaceum* は詰物の材料たるに止まらず、布帛の原料として有用であつた。これ等の綿布は先づアレクザンダアの征服に依つてギリシア人に注意されるゝところとなつた。前述の如くこの植物は早くペルシャ人が移植してゐた。又ヘブライ人もモスリンを知つてゐた。しかしロオマ人がこれを知るやうになつたのはアジア方面征討以後のことであり、それも極めて少量であつたらしい。少くともネロ (Nero) の時代まではあまり見るべきものがなかつた。然るに貿易風の發見以後、印度棉花の輸入は繼續的に増加し、東洋貿易の主要なる部分を形成するに至つた。當時すでにエチプト、チロス (Tylos) アラビア、シリシア (Cilicia)、パレスタイン (Palestine) 及び恐らくギリシアに於いても、棉花が栽培され

るやうになつたにも拘らず、良質なる印度産モスリンはロオマ帝國に於いて甚だ高く評價されてゐた。又この貿易發展の事實は今日までに發見された印度に於けるロオマ鑄貨に依つても知ることが出来る。即ちネロ以後のロオマの鑄貨が甚だ多く印度の棉花産出地方に發見される。⁽¹¹⁾

かく古代に於ける綿業は殆ど印度を中心としてゐたと云つてよい。古代印度は蓋し一大文化の中心地であつた。しかし中世を通じてむしろ一般に衰頹の傾向を辿つてゐた。人民は一般に貧しくなつた。又他方人口の増加を見ず、國內の産業も著しき發展をなさず、綿織物の需要の如きも、減退を示してゐた。⁽¹²⁾ 殊に中世を通じて印度は歐洲諸國とは直接何等の關係もなかつた。そこで吾人はこゝに眼を轉じて歐洲大陸に於ける綿業の状況を概括して置かうと思ふ。

(註一) "The Egyptians say it was Isis who invented, and also taught them, the art of spinning. The Chinese give the honour of this discovery to the Consort of their Emperor Yao. The Lydians ascribe this discovery to Arachne; the Greeks to Minerva; the Peruvians to Mamacella, wife of Manco Capac, their first Sovereign." Andrew Gray, "A Treatise on Spinning Machinery." (B. Palin Dobson, "The Story of the Evolution of the Spinning Machine," 1911, p. 14.)

- (註一) Edward Baines, "History of the Cotton Manufacture in Great Britain." 1835, p. 9
- (註二) Baines, *ibid.*, pp. 56-7.
- (註四) 拙著「世界商業史」古代篇(一九二九年版)101頁参照。
- (註五) James A. Mann, "The Cotton Trade of Great Britain," 1860, p. 2.
- (註六) "They (Indians) possess likewise a kind of plant which, instead of fruit, produces wool, of a finer and better quality than that of sheep: of this the Indians make their clothes." (Herodotus, book iii. c. 106; Baines, *op. cit.*, pp. 17-8.)
- (註七) Mann, *op. cit.*, p. 2.
- (註八) Andrew Ure, "The Cotton Manufacture of Great Britain" edited by P. L. Simmonds, 1861, vol. I, p. 80.
- (註九) 棉花のラテン名 *Gossypium* は Pliny の使用せるものである。これはさらば數種に分かれ、本文所載の *Gossypium Arboresum* (木棉) *Gossypium Herbaceum* (草棉) *Gossypium Barbardence* (長纖維棉)その他二三種に分かれる。(Dobson, *op. cit.*, p. 14 n.)
- (註一〇) 貿易風は紀元四七年ヒッパラスを云ふ水先案内に依つて發見された。(前掲拙著「世界商業史」111頁)。
- (註一一) E. H. Warrington, "The Commerce between the Roman Empire and India," 1928, pp. 210 ff.
- (註一二) Mann, *op. cit.*, p. 2.

三

歐羅巴に於ける綿業の發達は極めて遅々たるものであつた。歐羅巴に於いて最初に綿業が行はれたと云はれるのは西班牙である。即ち第十世紀であつたと云ふ。當時西班牙はモハメット教徒の領地であつた。アブデラアマン大帝 (Abderrahman II.) が九一二年から九六一年までコルドヴァ (Cordova) を支配してゐた時、これを移植し、コルドヴァを始め、グラナダ (Granada) セギル (Seville) 等に於いて綿業が盛んに行はれてゐた。しかしこれ等サラセン人とキリスト教徒との宗教的、人種的嫌悪は斯業の發達を著しく阻害する原因となつた。第十五世紀の後期にサラセン人が西班牙から追放さるゝや、殆ど全く衰滅してしまつた。かく綿業の普及の遅れてゐる時に、伊太利人殊にヴェニス (Venice) ゼノア (Genoa) ピザ (Pisa) の商人は綿布の貿易に従事してゐた。伊太利自身の綿業は第十四世紀の初頭にヴェニスに起つたと推定されるが、決して成功の域に達することは出来なかつたらしい。しかし伊太利に始まつた紡績業は決して無益なものではなかつた。ヴェニスからミラン (Milan) に始まつた伊太利の綿業は獨逸に傳へられた。ウルム (Ulm) 及びアウグスブルグ (Augsburg) がその初期の中心地であつた。かの

有名なるアウグスブルグのフツガー (Fuggur) 家の始祖は斯業に従事してゐた。⁽⁶⁾ 即ちその祖ハンス・フツガー (Hans Fugger) は一織匠であつた。⁽⁷⁾

獨逸に廣まつた綿業はアントワープ (Antwerp) 及びブルウッエ (Bruges) にも勃興するに至つた。これ等の地方で造られた綿織物は *Mustan* (綿天鵞絨) と稱せらるゝものであつた。第十六世紀頃の低地諸邦を記述した伊太利人キツキアルデニイ (Guicciardini) に依れば、アントワープは獨逸から一年に六十萬クラウンの綿天鵞絨を輸入し、北歐諸國に輸出した。又英國に對しては特に綿花を輸出したとこのことである。さらに彼は綿天鵞絨がブルウッエ及びガン (Ghent) に於いて多量に製造さるゝ旨を告げてゐる。⁽⁸⁾

以上述べたるが如く、伊太利に始まつた綿業は漸次に北方に擴まり、終にフランス地方にその中心地を見出すに至つた。フランス地方と英國とは古來最も密接なる關係がある。綿織物業が英國に至る足場はエリザベス朝の頃にはすでに出來てゐたと云つてよい。しかしエリザベス朝に於いて未だ綿業は重要な地位を占めてゐなかつた。シュルツエ・グヴァニッツ (Schulze-Gaevernitz) の指

摘するが如く⁽⁹⁾ 一六〇一年のエリザベスの救貧法に於いて貧民救済のために授産所の原料として、他の種々なる原料が擧げられてゐるにも拘らず、綿花の名稱を一言も告げてゐない。⁽¹⁰⁾ このことは英國に於いて綿業が如何に新しいものであつたかを示すよい例證となるであらう。然らば何時頃から英國に綿花が知られ、何時頃から綿紡績が始まり、何時頃から盛んになつたのであらうか。又如何なる方法を以つて行はれたのであらうか。換言すれば産業革命前に於ける斯業の状態を一瞥する必要がある。

(註一三) Baines, *op. cit.*, p. 38.

(註一四) Mann, *op. cit.*, p. 5; "Between the Mussulmans and the Christians there was as great a repugnance as between oil and water. Reciprocal hatred and scorn, and not less, the ignorance and poverty of the Christian nations, formed insurmountable bars to intercourse." (Baines, *op. cit.*, p. 42)

(註一五) "There is strong reason to believe, . . . from the silence of Denina and other historians, that the manufacture never attained any reputation, or considerable extent, in Italy." (Baines, *ibid.*, p. 43)

(註一六) L. S. Wood an A. Wilmore, "The Romance of the Cotton Industry in England," 1927, p. 28.

(註一七) "Die Fugger gehören nicht, wie die Welser, die Herwart, die Langenmantel u. a. zu den "uralten" Geschlechtern Augsburgs: Ihr Ahnherr Hans Fugger wanderte erst in Jahre 1367 aus dem Dorfe Gaben nach

Augsburg ein. Er war ein Weber, betrieb aber an h Handel und hinterliess 1409 das für damalige Zeit nicht unbeträchtliche Vermögen von 3000 fl." (Richard Ehrenberg, "Das Zeitalter der Fugger" Erster Band, S. 85.)

(註一八) Guicciardini, "Descrittione di tutti i Paesi Bassi," pp. 408, 401. (1581) (Baines, op. cit., p. 45 より引用。)

(註一九) G. von Schulze-Gaevernitz, "The Cotton Trade in England and on the Continent." translated by O. S. Hall, 1895, p. 20. 及び Baines, op. cit., p. 97. のと同じく指摘してゐる。

(註二〇) "...a convenient stock of flax, hemp, wool, thread, iron and other necessary ware and stuff to set the poor on work,"

四

綿業が何時英國に移入されたか正確なことは不明である。しかしこのことはあまり重要な問題ではない。ベエンス (Baines) の云ふところに従へば英國に綿 (cotton-wool) は極めて少量輸入されてゐたが、それ等は蠟燭の心に使用されたものである。これに關し今日殘存せる最も古い記録は一二九八年のヨオクシャア (Yorkshire) ボルトン (Bolton) 僧院の帳簿であると云ふ。⁽²⁵⁾ 第十三世紀に於いては殆ど大部分の織物は外國産であつに當時の英國に於いて、勿論綿織物業の存在したこ

とを期待することは出来ない。一二五三年にフランダアスの織匠に依つてリンネルが英國で最初に織られたと云ふのも⁽²⁶⁾ あまり重要な事實とは思はれない。要するに英國に於ける繊維工業の發達はエドワード三世の外國織匠招聘に始まるものであらう。一三二八年多くの織匠及び洗張匠に種々なる特權を與へて英國に呼んだのであつた。⁽²⁷⁾ このことは明かに英國産業界に甚大なる影響を與へたに相違ない。しかしこれは直接綿業の發達そのものではない。第十四世紀頃から使用された Cottons, fustians 等は眞の綿織物を指さず、毛織物の一種を呼んだに過ぎなかつた。⁽²⁸⁾ 一五七〇年の輸出品目録中にある "Manchester cotton goods" もかくの如きものに外ならない。⁽²⁹⁾

しかしベエンスの云ふが如く、蠟燭の心その他に使用され、綿布の製造には使用されなかつたのであらうか。⁽³⁰⁾ 一三〇三—一三〇四年の早きにボストン (Boston) イプスウィッチ (Ipswich) 及びサンドウィッチ (Sandwich) に綿花が輸入され、一袋二ベンスの關稅であつた。一世紀後一四〇二年八月二十九日ジョン・ブラウン (John Brown) なる者に屬する一船舶がリン (Lynn) に三俵の綿を積載してゐる。これに續いて

九月五日にはダニエル・ジョアニッソン (Daniel Johansson) の船舶が價格十磅の棉花二俵を齎らしてゐる。その他多くの棉花の輸入されたことはグラス (Glas) の擧ぐるところに依つても知り得る。事實これ等の棉花が如何に處分されたかは今日これを知り得ない。又これ等の一部が綿布に作られたと云ふ何等具體的な證據もない。しかし全部が蠟燭の心やその他に使用されたとは信じられない。

一五六〇年棉花はレヴァント (Levant) 地方から英國に輸入された。さらに一五八二年には土耳其と商業條約を結び、こゝにこれ等の地方との貿易を行ふために、レヴァント會社が創設された。土耳其に於ける織物に關する優秀なる技術を模倣習得せんがために特殊の命令が發せられた。かくの如きは當時の英國の進取的政策の一端を示すものである。恰もエリザベス朝時代に相應し、鞏固なる中央政府は一意國內の産業發達に留意し、これが促進に努力したのであつた。こゝに英國に於ける綿業發達の一轉換期を發見するのである、しかしレヴァント貿易は綿業發達に一つの刺戟を與へたかも知れないが、直接これが發展に寄與するところは少なかつた。

上述の如く、中世を通じて殆ど何等見るべきものゝなかつた英國の綿業界はエリザベス朝に於いてその黎明期を見出したのである。それは單に官民の努力に基くものではない。否むしろさう云ふ意圖的な計畫に基くものではなく、偶然的な原因に據るものであつた。即ち一五八五年フランダース地方の大商業都市アントワープがバルマ侯 (Duke of Parma) に依つて攻撃さるゝや、多くの新教徒の工匠や労働者が英國に逃亡して來たのであつた。その他西班牙領の和蘭から亡命した者も少なくなかつた。これ等の避難者に依つて、英國の綿業はその出發點を發見したのである。この影響は全く英國にとつては外來の福音であつた。英國人自身は新産業に對して十分の經驗もなく、自信もなかつた。しかも内部に於いては綿布に對する要求が漸く起りつゝあつた。こゝに新産業發達の機運がある。しかしその前途は必ずしも容易なものではなかつたのである。

(註一) "In sape et cotton ad candeam, xvii s. i. d." (Baines, op. cit., p. 96).

(註二) Mann, op. cit., p. 5.

(註三) W. Cunningham, "The Growth of English Industry and Commerce," Fifth edition, 1915, vol. I, pp. 305

よなほこのフランダース織匠の移住に關しては、故 W. J. Ashley の間に競争が

ある。それを關してはこの書の附録Eを参照。余はむしろ Cunningham と贊する者である。

(註二四) Baines, op. cit., pp. 92-94.

(註二五) Hubert Hall, "A History of the Custom-Revenue in England." 1892, p. 243.

(註二六) Baines, op. cit., p. 97.

(註二七) Gras, "The Early English Customs System, 1918, pp. 119, 161, 167, 553-5, 656-9, 994 seq.

(註二八) Wood and Wilmore, op. cit., p. 29.

(註二九) "The Queen's letters to the Grand Seigneur were received with much civility, being delivered to him by her Ambassador Harborne, in the year 1582, whom the empowered to settle Consuls in the several ports, and to establish laws or rules, to be observed by the English trading to Turkey. With the first factors, the indefatigable Hakluyt sent excellent instructions, 'for enquiring into the dying stuffs in Turkey, and into the art of dying: also what of those durgs might be produced in England, and how beneficial such new productions should have been to us; which he instances in that of saffron first brought into England by a Pilgrim;....'". (Adam Anderson, An Historical and Chronological Deduction of the Origin of Commerce, 1801, vol. II, pp. 154)

(註三〇) Baines, op. cit., p. 99.

五

第十七世紀に於いて綿業の確實なる存在は人の屢々引用するリキス・ロバア (Lewis Roberts) の "The Treasure of Traffike" (1641, London) に依つて證據立てられる。それに依れば當時すでにマンチェスタアを中心として相當の綿業が發達してゐたと考へられる。⁽³¹⁾しかし未だ十分な状態に到達してゐたとは思はれない。何れにしてもこれ等ランカシヤア (Lancashire) 地方に綿業が特に發達した理由として、チャップマン (Chapman) は三個の原因を擧げてゐる。第一はランカシヤア地方にはずでに古くから毛織物やリンネルに關する制度が存在し、原料を布帛にすることに便利であつたこと。第二にマンチェスタアの如きは商人町であり、かつ新産業は何等古き規制の束縛を受けてゐなかつたこと。否むしろ第三にマンチェスタア・コレツチの監督は外國工匠の定住を獎勵した。⁽³²⁾以上の理由は必ずしも前述の逃亡者がこれ等の地方に定住して斯業の發達に貢獻したと云ふ通説と何等撞著するところない。チャップマンの云ふ如くこれに關する決定的な證據はないかも知れない。しかし氏の擧ぐるその第三の理由とも云ふべきものは少くともこれが傍證となり得る。吾人は進んでこゝにこれ等の地方に於ける斯業の發達

せる経過の概要を知る必要がある。

マンチエスタアの製造業者發展の階梯はやゝ概括論に過ぎるが、大體四期に分かつことが出来る。第一期は製造業者が單に生活費を得んがために烈しく勞働に従事してゐた時代で、何等の資本の蓄積も未だ存在してゐなかつた。第二期は彼等が多少の財を蓄へ始めたが、未だ節約と僅かな利益を有するに止まり、依然として烈しく勞働してゐた時代である。第三期は漸く奢侈が生じ始め、英國内のあらゆる市場都市に註文取りを派して職業を發展させてゐた時代である。最後に第四期に至れば、歐羅巴全體に註文取りや代理商を派遣して商賣を擴張した。この第二期の始まつたのは大體一六九〇年であり、第三期は一七三〇年頃、第四期は一七七〇年頃以後である。⁽³³⁾ このマンチエスタア商人の發展の四時期は即ち綿業發達の順序を示すものである。

しかしこれ等の時期のランカンシャアの綿業者には種々なる程度の者が存在してゐた。自分は何等製造に直接従事しない商人もあつたらう。又僅かに副業としてこれを行ひ、主としてマンチエスタアの商人に、その製品を販賣してゐた者も

あつた。前述の第二期の終り頃までは、その製造方法はジャアゲン (Juggen) の紡錘車の發明が一五三〇年にあつたけれども、なほ舊態依然たるものがあつた。三百年以前フランスの織匠の使用してゐた單純な織機を使用してゐた。⁽³⁴⁾ 他方に於いて又資本家的商人も未だ殆ど發生してゐなかつた。この事情は明かに當時の綿花貿易に反映を示してゐる。⁽³⁵⁾ 即ち殆ど綿花輸入は増加せず、時に却つて減退を示してゐた。假令他方綿絲が相當輸入されてゐたとしても、かくの如き状態は未だ綿業の進歩を示すものではない。元來綿業に於いて最初に工場制度を惹起したのは後に述ぶるが如く、紡績方面であつた。⁽³⁶⁾ 然るにこの方面に於いて多くの輸入を見る状態にあつたとすれば、綿業の程度が未だ低いものであつたことは明かである。

然るに一七三〇年以降に於いてこの方面に於ける發展は甚だ著しいものがあつた。一七二六年にこの方面の旅行記を著したダニエル・デフォオ (Daniel Defoe) は⁽³⁷⁾ マンチエスタアの急速なる發展、人口の増加を極論してはゐるが、⁽³⁸⁾ その綿業に關しては僅かに毛織物業よりも早くマンチエスタアに發生したものであらうと云

ふ憶測を、しかも誤れる資料に依つて斷定してゐるに過ぎない。⁽³⁹⁾然るに一七七〇年に刊行せられたアーサー・ヤング(Arthur Young)の旅行記には織物業の發達、種類、賃銀、その他に關し詳細な記述がなされてゐる。⁽⁴⁰⁾そして多くの勞働者がよき賃銀を以つて働き得る機會を有し、家族の多いこともこの地方では厄介にならぬと述べてゐる。⁽⁴¹⁾

この二大旅行者の記述を比較すれば、第十八世紀の中頃、即ち前述の第三期に相應する時に、綿業が如何に發展したかを大體推測し得る。しかしなほ一層これを明確ならしむるために、綿貿易の状態と機械の發明とについて一瞥する必要がある。先づ前者について述べよう。

(註三一) "The town of Manchester, in Lancashire, must be also herein remembered, and worthily for their encouragement commended, who buy the yarn of the Irish in great quantity, and, weaving it, returne the same again into Ireland to sell: Neither doth their industry rest here, for they buy cotton wool in London, that comes first from Cyprus and Smyrna, and at home worke the same, and perfect it into fustians, vermillions, amibles, and other such stuffes, and then return it to London, where the same is vented and sold; and not seldom into forraign parts, who have means, at far easier terms, to provide themselves of the said first materi-

als." (Orig. Edition pp. 32-33. Baines, op. cit., p. 100 より引用。)

(註三二) Sydney J. Chapman, "The Lancashire Cotton Industry," 1904, p. 1.

(註三三) Ibid., p. 5.

(註三四) Mann, op. cit., p. 6

(註三五) この時期に於ける綿花及び綿製品の輸入表は次ぎの如くである。(Baines, op. cit., p. 110.)

綿	花	綿製品(公定價格)
一六九七年	一、九七六、三五九封度	五、九一五磅
一七〇一年	一、九八五、八六八封度	二三、二五三磅
一七一〇年	七、一五、〇〇八封度	五、六九八磅
一七二〇年	二、九七二、八〇五封度	一六、二〇〇磅
一七三〇年	一、五四五、四七二封度	一三、五二四磅

(註三六) J. Jewkes, "The Localisation of the the Cotton Industry." (Economic History, A Supplement of the Economic Journal, v. 1. II. No. 5. January 1930, p. 92.)

(註三七) Daniel Defoe の "Tour through the Whale Island of Great Britain." は最初三卷に分けられて出版された。第一卷は一七二四年に、第二卷は一七二五年に、第三卷は "Misc's Weekly Journal" の一七二六年八月十三日號に「本日發賣」と記されてゐるが、メイトル・ヘチは一七二七年となつてゐる。こゝでは暫く G. D. H. Cole の推定

と從ひて一七二六年に刊行されたものから。(Defoe, A Tour, edited by G. D. H. Cole, vol. I, p. xxv.)

(註三八) “But the increase of Buildings at Manchester within these few Years, is a Confirmation of the increase of People; the Town is extended in a surprising manner; abundance, not of new Houses only, but of new Streets of Houses, are added, a new Church also; and they talk of another, and a fine new Square is at this time building; so that the Town is almost double to what it was a few Years ago, and more than double to what it was at the time I am to mention.” (Ibid., vol. II, p. 671.)

(註三九) 綿業の發達の早かつた理由として、羊毛の製法そのものの改良の早かつたこと、羊毛の推定に外ならない。即ち“……we have reason to believe it began something earlier than the great Woollen Manufactures in other Parts of England……, because the Cotton might itself come from the Mediterranean, and be known by Correspondents in those Countries, when that of Wooll was not pursued at, because our Neighbours wrought the Goods, and thought they brought the Wooll from the England, yet we did not want the Goods, whereas, without making the Cotton Goods at home, our People could not have them at all; and that Necessity, which is the Mother of Invention, might put them upon one;……”⁽¹⁾ 羊毛の製法は、Queen Elizabeth's time, when the Woollen Manufacture was, through much improved, yet as we may say, in its Infancy, or, at least, not at full Age we may reasonably believe, that Cotton was the elder Manufacture of the two, and that by some considerable time.” (Ibid., pp. 674-5.) したがって、羊毛は固く“cotton”と

純粹のものを見て云ひ得るに過ぎない。所謂“cotton of Manchester”が綿織物でなかつたことは前述の如くである。Camdenの“Britanniae Descriptio” (1586)によれば、それは綿織物とは別物である。

(註四〇) Arthur Young, “A Six Months Tour through the North of England.” 1770, vol. III, pp. 241-250.

(註四一) “……the workmen who are industrious, rather more so than the common run of their brethren, have never been in want in the highest of the late high prices. Large families in this place are not incumbrance all are set to work.” (Ibid. pp. 249-250.)

六

第十八世紀に於いて英國が商業上最も優秀なる地位を占むるに至つたことは、すでに他の機會に於いて屢々論究せるところである。⁽²⁾ かくの如き商業は又他方國家の財政の必要を満たす有力なる源泉の一つであるが故に、當時の統治者——英國に於いてはエリザベス、クロムウェル、ウィリアム三世——は商業を保護し、これを促進せしむるに至つたことは當然である。而して商業にとつて第一に必要なことは個人的自由と財産の保證である。これ等は英國に於いて、他の大陸諸國に先立つて認めらるゝところであつた。⁽³⁾ これ等の條件を具備せる英國に於いて

多くの欲求を満たさんがために、生産技術の進歩が發生し、さらにそれが商業的發展を生ぜしめたことは明かである。これ等の相互作用は又綿業の發展にも認められなければならぬ。

先づエリザベス朝以後に生じた絹布その他の輕織物の異常なる嗜好について一言しなければならぬ。佛蘭西の輕織物に對する欲求は、佛蘭西貿易が禁ぜらるゝと共に、一六六七年のコルベール (Colbert) の極端なる保護政策に對抗して、一六七八年佛蘭西産の絹布、リンネル、葡萄酒、ブランデー等の輸入禁止⁽⁴⁾——これに印度産の輕織物に對し異常なる需要を生じた。殊に宮廷を中心とする上流階級に於いて印度品は一つの流行の的となつたのである。この事實に關しては當時の文獻が甚だ多く指摘するところである。⁽⁵⁾かくして綿布に對する需要は先づ國內に於いて著しく高められた。他方新大陸を始め、その他の植民地に於ける需要も漸次に増加しつゝあつた。例へば時期はやゝ後になるが、ヤングの當時に至れば、マンチエスタアの製品の四分の三はアメリカに向けられたと云ふことである。⁽⁶⁾

上述の如き需要に對して、政府はさらに綿業保護の方針を採用した。その最も著しい、又比較的早い例は一七〇〇年の法例である。即ち一七〇一年九月二十九日以降、キヤラクその他の織物にして、形付、染上げ等のなされたものはこれが輸入禁止を命ぜられた。⁽⁷⁾そのため印度産の白キヤラクの輸入が夥しく増加したので、一七二〇年には形付染キヤラクの着用をさへ禁止したのであつた。かくの如き法令の結果として、如何なる状態を生じたか。これ等の織物類が英國市場に齎されなかつたために、印度の手工業に多少の損害を生じたことは恐らく免れなかつたであらう。しかし英國以外の國に再輸出する目的を以つて輸入することは許されてゐたからして、直接斯業を衰微せしむるやうな大なる影響はなかつた。唯この禁止が英國に於いて機械の發明を促がすに役立つたことは極めて明かであらう。⁽⁸⁾さらにはその以後に於いても印度品に幾多の重税が課せられ、英國並びにその市場からこれを驅逐するに努めた事實は⁽⁹⁾一層この勢ひを助長したものと見て差支へない。現に一七三〇年以後、英國綿製品の輸出は次ぎの如き著しい増加を示してゐる。⁽¹⁰⁾

年次 英國品の公定價格

一七三〇年	一三五二四磅
一七四一年	二〇七〇九磅
一七五一年	五四九八六磅
一七六四年	二〇〇三五四磅

かくの如き發展を成就し得た根底にはさらに二つの條件を必要とする。一つは原料品の容易に獲得し得ることであり、他は生産技術の發達であるが、後者については後に述べるつもりであるから、先づ原料に關する問題を略述して置かうと思ふ。

従來原料たる綿花はスミルナ(Smyrna)からロンドンに、ロンドンからマンチエスタアに齎されてゐた。かくの如きは當時未だ運河すらも完成されない時に際し、如何に不便であつたかは容易に想像し得るところである。然るに貿易港としてリヴァプールが發達して來たことは、⁽⁵⁵⁾マンチエスタア並びにその近郊の綿業者にとつて非常に大なる利益であつた。即ち直接東洋及び西印度諸島の綿花を

輸入することが出来るやうになつた。今や東洋は綿花の供給を獨占するわけにゆかなくなつた。アンチリーズ諸島(Antilles)やブラジル(Brazil)に於いて産出されるやうになつた。⁽⁵⁶⁾しかも支那や印度の綿花はそれ等の餘剩收穫が輸出されたに過ぎなかつたが、新大陸から歐羅巴の諸港に來たるものはその收穫の殆ど全部であつた。⁽⁵⁷⁾

以上述べたるが如く、一方需要の大なるあり、他方原料の供給あり、しかも時代は科學的研究の勃興時代である。⁽⁵⁸⁾生産技術の進歩、機械の發明は當然起るべき運命にあつたと云つても決して過言ではない。最後に機械の發明を略述してこの序説を終らうと思ふ。

(註四二) 拙著「英國資本主義成立史」(一九二八年版)第四章參照。

(註四三) G. von Schulze-Gaevernitz, op. cit., p. 25.

(註四四) 「英國資本主義成立史」五〇八—五一〇頁。

(註四五) P. J. Thomas, "Mercantilism and the East India Trade," 1926, p. 26.

(註四六) 前註に掲げた Thomas の著作中にも多くの例が掲げてある。今こゝにはその一例として Defoe, Weekly Review, January, 1708, (Paul Mantoux, The Industrial Revolution in the

Eighteenth Century, translated by M. Vernon, p. 203 より引用) の一節を掲げし譯なり。 "We saw four persons of quality dressed in Indian Carpets, which, but a few years before, their chambermaids would have thought too ordinary for them; the chintzes were advanced from lying on their floors to their backs; from the foot cloth to the petticoat; and even the Queen herself (Mary, wife of William the Orange) at that time was pleased to appear in China and Japan, I mean China silks and calicoes. Nor was this all, but it crept into our houses, our closets and bedchambers; curtains, cushions, chairs, and, at last, beds themselves were nothing but calicoes or Indian stuffs."

(註四七) Arthur Young, op. cit., vol. III, p. 250.

(註四八) "...from and after the 29th day of September, 1701, all wrought silks, Bengalls, and stuffs mixed with silk or herba, of the manufacture of Persia, China, or the East Indies; and all calicoes, painted, dyed, printed, or stained there, which are or shall be imported into this kingdom, shall not be worn or otherwise used in Great Britain; and all goods imported after that day, shall be warehoused, and exported again."

(註四九) J. C. Sinha, "Economic Annals of Bengal," 1927, pp. 26-28.

(註五〇) Bal Krishna, "Commercial Relations between India and England," 1924, pp. 265 ff.

(註五一) Baines, op. cit., p. 110.

(註五二) リットン・ソールの人口の發達については拙稿「産業革命前に於ける英國社會狀態概論」(『三田學會雜誌』第二十三卷第八號所載) 參照。

(註五三) しがし北米合衆國が綿花を輸出し得るやうになつたのは大分後のことであつた。

あつた。一七八四年にアメリカの船が綿花八袋を積載してリットン・ソールに到着した時、税關吏は綿花を合衆國の産物にあらずと考へ、これを沒收したもののやうである。(Baines, op. cit., pp. 301-2)

(註五四) Mantoux, op. cit., pp. 205-6.

(註五五) "The same age in which the union of science and art was thus happily consummated fortunately found society, in Great Britain at least, prepared, by the accumulation of capitals during a long period of peace and security, to cherish their prolific offsprings, and to rear them up to productive maturity." (Ure, op. cit., vol. I, p. 214.)

七

こゝに發明されたる機械の詳細なる説明を企てることは私のよくするところでもなく、又事實上必要なことでもない。唯その變遷の概略を記述するに止めて置く。

最初マンチェスタア地方に於いて使用せられた織機には二種類あつた。一つは幅の狭い布帛を織るに適した和蘭織機と稱せらるゝもので、他の一つは普通の手織機であつた。前者は同時に幾つも織り得るが、大幅のものに適せず、後者は手

で梭を經を通じて前後させるので、頗る拙劣であり、生産量も少なかつた。一七三三年にジョン・ケエ (John Kay) が所謂飛梭 (Flying shuttle) を發明した。この發明は頗る簡単なものであつた。主として picking-peg を案出した點にあるのであるが、それに依つて従來二人の織匠を必要とした廣布を容易に織ることが出来るやうになつた。ケエはこの外にも織機の箴 (reed) に大なる改良をなし、又力織機をも考案した。その特許を得たのは一七四五年であつた。彼の息子のロバートも上下動杼箱 (drop-box) を一七六〇年に發明して織機を改良した。

ケエ父子に依る flying-shuttle と drop-box との發明が和蘭機織の移入と結びついて第十八世紀の初頭に織る方面には甚だ大なる進歩をなした。又他方種々複雑なる織物を作るために多くの技巧が案出された。かくしてこゝに量に於いても、質に於いても著しく進歩した。即ち殆ど以前の二倍になつたためこゝに絲の供給が需要に及ばなくなつて來た。従つて紡績機に對する發明が要求さるゝに至つた。

紡績機の改良は先づジョン・ワイアット (John Wyatt) とリチャード・ボオル (Lewis

Paul) と兩者の協働に依つて行はれた。佛蘭西からの亡命者であるボオルの名に依つて獲得された一七三八年の特許は、事實はワイアットの手に依つてなされたところ大であつたと云ふことである。その機械はロール紡績機 (spinning by rollers) とも云ふべきもので今日の洪大なる紡績工場に於ける紡績機の基礎をなすものであつた。しかし未だ實際的效果を齎らさなかつた。ボオルは特許料として二十年間に二萬磅以上の金を作り、少くともロンドンに一箇所、バアミンガム (Birmingham) に一箇所、ノオザンプトン (Northampton) に一箇所、その機械を使用する工場があつた。殊にバアミンガムに於いては驢馬に依り、ノオザンプトンに於いては水力を動力としたと云はれてゐる。又その後にも彼は多少の發明をなしたが、それにも拘らず未だ經營的方面に成功することは出来なかつたのである。

ボオルの協働者であり、又彼よりもより以上の天才を有してゐたと思はれるワイアットは彼の後に來たるべき事實に對して重要な示唆を與へてゐる。即ち一つは小生産に機械を適用し得るやうにしようと思ふ考へであつた。動力の使用は多くの資本を必要とする。又當時の主要なる動力たる水力を利用し得ぬ者

がある。それ等の者に對して小規模の機械を案出せんとする考へが浮んだ。⁽⁶¹⁾他の一つは工場制度が近き將來に來たるべきことをすでに考へてゐた。そしてそれは直接には製造業者にとつて大なる利益となるが、又他方勞働者及び一般國民にとつても甚だ有利なものであると考へてゐた。⁽⁶²⁾ワイアットのこれ等の思想は彼等の時代に於ける二個の潮流を指摘するものである。一方は當時存在せる一種の元締制度⁽⁶³⁾に對する改良案であり、他方は當時現存せる制度に對する絶對的改革である。恐らく當時の發明者は何れも、意識的もしくは無意識的に、この何れかに向つて進みつゝあつたのである。後に述ぶるハアグリイヴスの發明はその前者に屬する。

ワイアット及びポオルの發明は明かに當時の大なる要求に對してなされたものであり、又よくその目的を達したものであつた。しかし少しく時代に先立ち過ぎたものであり、又これが實際的適用に齟齬を生ぜしめたのであつた。⁽⁶⁴⁾かくしてハアグリイヴス (James Hargreaves) の精紡機 (Spinning jenny) 及びアーグライト (Richard Arkwright) の水力紡機 (water frame) の發明さるゝまで大發展の時期を待たなければならなかつた。

綿業に於ける産業革命はこの一七六四年のハアグリイヴスの發明を以つて、時期を劃すべしと云ふ者がある。⁽⁶⁵⁾又ある者は眞の工場制度の發明は一七六八年のノッチンガム (Nottingham) に於けるアークライトの紡績工場設立にありとする。⁽⁶⁶⁾ハアグリイヴスの發明は八個の紡錘を一つの軸に依つて回轉せしむるものであり、前述せるが如く、小基模なものである。この意味に於いても、もしも産業革命の特徴を工場にありとするならば、當然後者の方が正しい。しかしこの六十年代の末から七十年代の始めにかけて、先づ紡績業に於いて近世的改革が成就されたと云ふべきであらう。所謂産業革命の本論はこゝに始まるとする所以である。

この事實は明かに綿花の輸入額に依つても表示される。第十七世紀の末から第十八世紀の中頃までの輸入額があまり著しき變化を示さなかつたことは、すでに前述せるが如くである。然るに一七四〇年に百六十萬封度餘であつた綿花は一七五〇年には三百萬封度、一七六四年には四百萬封度の輸入を見てゐる。⁽⁶⁷⁾さらに一七八五年パツブルウィック (Papplewick) の工場に於いて蒸氣力が動力として

使用されるに至つて、⁶⁶⁾世界市場に於ける英國綿業の地位は十分に確保されるに至つた。しかしナポレオン戦争の終る一八一四年までには、斯業の本場たるベンガル(Bengal)の綿業に大なる影響を與へることは出来なかつたのである。⁶⁷⁾

(註五六) George W. Daniels, "The Early English Cotton Industry." 1920, pp. 72-74.

(註五七) Mantoux, op. cit., pp. 213-4.

(註五八) Mann, op. cit., p. 7.

(註五九) マンマンの子チャールズとその子弟と與つた手紙の一節に "...in 1741 or 1742, a mill, turned by two asses walking round an axis, was erected in Birmingham, and ten girls were employed in attending the work." 又その他に "...The machinery was sold in 1743. A work upon a larger scale, on a stream of water, was established at Northampton,..." 等ありし事。(Baines, op. cit., p. 134 以下引用)

(註六〇) Daniel, op. cit., p. 76.

(註六一) "It may be found useful, where the spinners live remote from the clothiers, or when they have not the conveniency of such mills, to have small moveable ones made to spin the work of a family or two." (Wyatt, Mss. I, 34; Mantoux, op. cit., p. 217. 以下引用)

(註六二) "An additional gain to the clothier's trade naturally excites his industry as well as enables him to extend his trade in proportion to his gain by the machines. By the extension of his trade he will likewise take in

some men of the 33 per cent. left unemployed.... Then he wants more hands in every other branch of the trade, viz. weavers, shearmen, scourers, combers, etc.... These workmen now having full employ will be able to get more money in their families than they all could before." (Wyatt Mss., I, 33. Oct. 21 et, 1736. Mantoux, *ibid.*)

(註六三) この時代の生産組織の概論的記述は本書第二十二卷第八號所載の前掲拙稿に記してあるが、綿業に關する詳細な記述は他の機會に譲る。

(註六四) "But they were too early. For an invention will suffer if it appears too long before the moment when the need it is meant to satisfy has reached its climax." (Mantoux, op. cit., p. 220.)

(註六五) L. W. Mohr, "England on the Eve of the Industrial Revolution." 1925, p. 175.

(註六六) Schulze-Gaevernitz, op. cit., p. 28.

(註六七) "In 1764...., betokening the auspicious non-day of the cotton trade of England." (Ure, op. cit., vol. I, p. 222.) 及び前掲註三六參照。

(註六八) J. L. Hammond and Barbara Hammond, "The Rise of Modern Industry." 1926, p. 127. n.

(註六九) Sinha, op. cit., p. 249.

八

以上の記述に依つて、私は大體英國に於ける綿業が如何にして惹起されるに至つたかと云ふ方面を論じ得たつもりである。しかしなほこゝに他の一面が残さ

れてゐる。それはかくの如き變化が如何なる影響を生じたかと云ふ方面である。換言すれば英國にとつて新しい産業である綿業が特にランカシャー一帯に移入さるゝと共に、その分配生産の組織が如何に形成され、新しく生じつゝあつた労働者階級⁽⁷⁰⁾と如何なる關係にあつたかと云ふ問題である。これ等は産業革命期に於ける綿業を論ずる以前に、一瞥することを要する他の一面であるを考へる。

かくの如き綿業發達の過程は他方英國に於ける資本主義制度成立の一例ともなり、又資本主義的觀念の發現となれるものであつた。⁽⁷¹⁾故にこゝには當時の對外商業が如何に國內の新産業を刺戟したかを述べた。その結果はワイアットの豫測せるが如く、大工場への進路をとつた。しかし彼の想像せる如く、機械の採用は労働者、その他の者にも幸福であつたらうか。又かくの如き機械に對して労働者は如何なる態度をとつたらうか。當時に於いても將來の機械觀は區々であり、種々なる意見を有する者があつた。しかし何れにしても蒸氣が動力として發見さるゝと共に、——かのワット(Watt)すらも將來の蒸氣力の應用についてはこれを十分に會得してゐなかつたやうではあるが⁽⁷²⁾——こゝに急激な變化を生じ、社會

の均衡は完全に打破されたのであつた。これ等の問題はすべて他の機會に譲り、こゝでは單にそれ等の問題を提起するに止めて置く。

(註七〇) 拙稿「英國に於ける労働者階級の發生」本誌第二十三卷第一號所載、參照。

(註七一) Theodor Volgelstein, "Organisationformen der Eisenindustrie und Textilindustrie in England und Amerika," 1910, S. 112.

(註七二) Watt & Boulton に宛てた書信の一節を曰く、"If you come home by way of Manchester, please not to seek orders for cotton-mill engines, because I hear there are so many mills erecting on powerful streams in the North of England, that the trade must soon be overdone, and consequently our labour may be lost." (Hammond, op. cit., p. 127. より引用。)

(一九三〇年五月二十日稿)